

シリアス・レジャーの特徴を持つ 海洋スポーツイベントに関する研究

——慶良間海峡横断サバニ帆漕レースの参加者を対象とした調査——

蓬 郷 尚 代

1. 研究の目的

シリアス・レジャーとは、カナダの余暇社会学者であるロバート・ステビンズ¹⁾が提唱した概念であり、「アマチュア、趣味人、ボランティアによる活動で、彼・彼女らにとって大変重要で面白く、充足をもたらすものであるために、典型的な場合として、専門的なスキルや知識、経験の獲得と表現を中心としたレジャーキャリアを歩み始めるもの²⁾と定義されている。また、シリアス・レジャーには特別な技術・知識・経験が必要とされ、単なる自由時間や余暇にはない重要な社会的アイデンティティの形成に関与していることも報告されている³⁾。近年、コロナ禍におけるランニングブームが後押ししたこともあり、ハードなトレーニングを積み、フルマラソンではサブ3.5やサブ4を目指すといったスピード・距離ともにトップレベルを目指し走っているアマチュアランナーが増加している。彼らを「シリアスランナー」と称して、ファンランナーとは区別したシリアスランナー向けのシューズなどがスポーツメーカーから販売されるようになるなど⁴⁾、シリアス・レジャーとしてのスポーツも広く認知されるようになってきている。ステビンズ⁵⁾はシリアス・レジャーの特徴として、①根気強さの必要性、②キャリアの存在、③専門知識に基づいた努力の要求、④自己実現などの持続的利得の享受、⑤アイ

デンティティの構築、⑥独自のエートスの存在、を挙げている。シリアス・レジャーに関する研究は、様々なジャンルのシリアス・レジャーがどのような価値感やエートスのもと実践されているかを明らかにしようとする研究⁶⁾や、マイノリティによる実践⁷⁾、生活の質に対する効果⁸⁾などについて、諸外国を中心に進められているのが現状である。

このようなシリアス・レジャーの要素を包含している活動の1つに「サバニ帆漕レース」がある。サバニ帆漕レースは「古来より受け継がれてきたサバニによる操船技術の復活と帆走の再現を目指し、次の世代へと伝えていく」という思いを具現化し、沖縄の伝統的漁船である帆掛けサバニの伝統を復興させる運動の1つとして沖縄県座間味島から那覇港までの約36kmを帆掛けサバニによって海峡横断するものであり、2000年に始まり、2019年で20回を迎えた、長期継続開催されている数少ない海洋スポーツイベントの1つである。大会名にある「帆漕」という言葉は、帆走（船に帆を張り風の力で走ること）の「走」を「漕」に変えた、この大会から生まれた造語であり、帆を操りながらエーク（櫂）を使って船を漕ぐという、古来より伝わるサバニ操船技術の再現・継承への想いが込められている⁹⁾と記載されている。1艇の帆掛けサバニには最大6名まで乗艇することが認められている。毎年レース開催に合わせて沖縄県内外から多くのチーム関係者がレースに参加し

ており、第20回大会までの参加チーム数は平均34.6艇であった。第13回大会以降は、レース前日に座間味島近隣の無人島を周回する約10kmのプレ(島内)レースが開催されている。プレレース後には各艇のインスペクションが実施され、サバニや帆の大きさがルール規格内であることが確認される。また、前夜祭ではレース関係者が一同に集まりプレレース表彰式が開催される。そこには座間味島内の飲食店や民宿関係者も加わって島民による催しなどがおこなわれ、参加者同士のみならず島民との交流の場にもなっている。レース当日は、協賛企業らが支援したビーチクリーンや沖縄文化に則った航海安全を祈る祈禱がおこなわれ、7時間をリミットとする海峡横断レースがスタートする。レース後にはゴールである那覇市の泊港にて表彰式が開催される。サバニ帆漕レースは、座間味村と那覇市が共同開催し2拠点を結ぶ2日間の大規模な海洋スポーツイベントと言える。

日本においてシリアス・レジャーを扱う研究は、端を発したばかりであり多くの研究を見ることができない。また、趣味に留まらない専門的知識と技術を必要とするシリアス・レジャーとしてのスポーツ愛好家は、その特性からスポーツを趣味とする人の中でも大変人数が少ないアマチュアアスリートである。そのような希少なアマチュアアスリートがどのような行動特性を持っているのかを明らかにし、彼らが魅力を感じているレースについて検証することは、余暇活動の充実や生涯スポーツ活動への動機づけ、さらにはスポーツイベントを継続的に開催させるための要素を明らかにするための一助となると考える。

そこで本研究は、座間味島～那覇間(約36km)の慶良間海峡を伝統木造船にて横断するサバニ帆漕レースをシリアス・レジャーの1つと位置づけ、サバニ帆漕レースに参加経験のある者を対象とした質問紙調査を実施し、シリアス・レジャーとしての海洋スポーツイベントとそれに参加する実践者の特徴を明らかにするための基礎資料を得ることを目的とした。

2. 方 法

2-1 調査方法

調査はサバニ帆漕レース第20回大会開催後の2019年11月から12月に、インターネット上にGoogleフォームを用いたweb調査を設置し、サバニ帆漕レースに参加経験のあるサバニ愛好家を対象としてアンケート調査を実施した。回答の依頼は機縁法を主な方法として、メールでの依頼やSNSでの情報公開等によりweb調査フォームのURLを周知した。また、同一人物による重複回答を防ぐためにシステム上の設定をおこなった。

2-2 調査の倫理的配慮

調査を実施するにあたり、回答前に研究の趣旨や倫理的配慮、および研究参加についての説明を記載したページを設置した。

2-3 調査項目と分析対象項目

web調査では、性別・年齢・居住地等の属性のほか、サバニ帆漕レース出場回数、サバニの保管場所、レース運営・プレ(島内)レース・本レース・ルール・開催時期等のレースに関わる満足度、直近に参加したサバニ帆漕レースにおける座間味島および本島における滞在期間、サバニ帆漕レースの魅力、サバニ帆漕レースへの参加を決めた理由等を質問項目とした。レースに関わる満足度については、「非常に満足」から「非常に不満」の5段階でリッカート尺度を採用した。サバニ帆漕レースの参加を決めた理由、サバニ帆漕レースの魅力の自由記述部分は、居住地や参加回数といった背景を加味したうえでカテゴリーの生成をおこなった。自由記述部分における分析では質的研究手法の1つであるSCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いてカテゴリーを生成した。また、トライアングレーションを実施し、分析や解釈の過程における妥当性を担保した。本研究におけるトライアングレーションでは、著者のほか海洋スポーツを専門とし、当該レースにも複

数回参加経験がありレースの背景をよく理解している研究者を交え検討した。

3. 結 果

回答は19チーム64名（男性43名，女性21名）から得られた。回答者は50歳代が20名と最も多く，次いで40歳代が18名であった。沖縄県居住者41名（64.1%），沖縄県居住者のうち座間味村21名（32.8%），本島16名（25.0%），座間味村以外の島部4名（6.3%），沖縄県外居住者23名（35.9%）であった（表1，図1）。レース初参加は6名（9.4%）であり，参加者の90%以上は複数回のレース経験者であった。参加回数は2～4回が32名（50.0%）と最も多く，次いで5～8回（11名・17.2%），9～12回（8名・12.5%）であり，第1回から全て参加している回答者は1名であった（図2）。

サバニの保管場所については，レースのスタート地点である座間味島に保管していると答えた回

答者が36名（56.3%）と最も多く，次いで沖縄本島（糸満市）13名（20.3%），沖縄本島（糸満市以外）4名（6.3%），葉山と沖縄4名（6.3%），慶留間島2名（3.1%），西表島2名（3.1%）であり，沖縄県外から参加するチームも座間味島をはじめとする沖縄県内にサバニを保管していることが示され，また沖縄県内であっても座間味村以外の諸島部からサバニを運搬しレースに参加していることが明らかとなった（図3）。

レースに関わる満足度では「① 20回大会全体」「② レース運営」「③ プレ（島内）レースコース」「④ 本レース（座間味島～那覇）コース」「⑤ レースに関するルール」「⑥ 申込み方法」「⑦ レース開催時期」「⑧ レースに関する情報発信」「⑨ 参加者間の交流」「⑩ 座間味島民との交流」「⑪ 前夜祭」「⑫ 表彰式」「⑬ サポーターまたは観戦者の応援環境」「⑭ 協賛企業らによる取り組み（ビーチクリーン）」の14項目について回答してもらい，結果を図4に示した。「① 20回大会全体」「② レース運営」「④ 本レース（座間味島～那覇）

表1 回答者の属性

居住地域	人数	性別		年齢					
		男性	女性	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳
座間味島在住	21	9	12	0	6	2	9	3	1
座間味島以外の沖縄県在住	20	15	5	1	2	3	4	8	2
沖縄県外在住	23	19	4	1	3	4	5	9	1
合 計	64	43	21	2	11	9	18	20	4

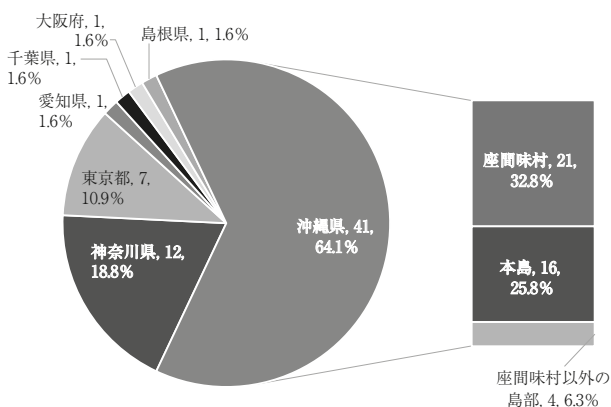


図1 回答者の居住地

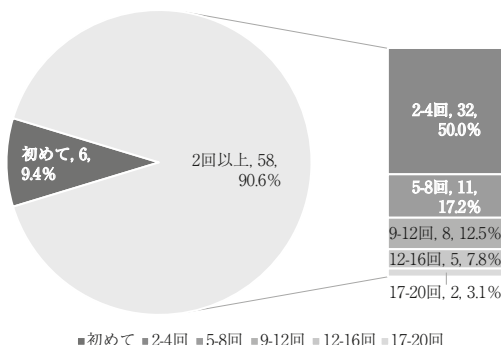


図2 サバニ帆漕レース参加回数

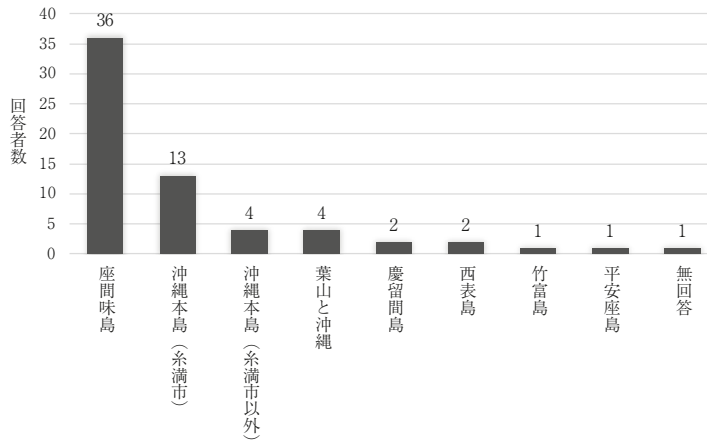


図3 サバニ保管場所

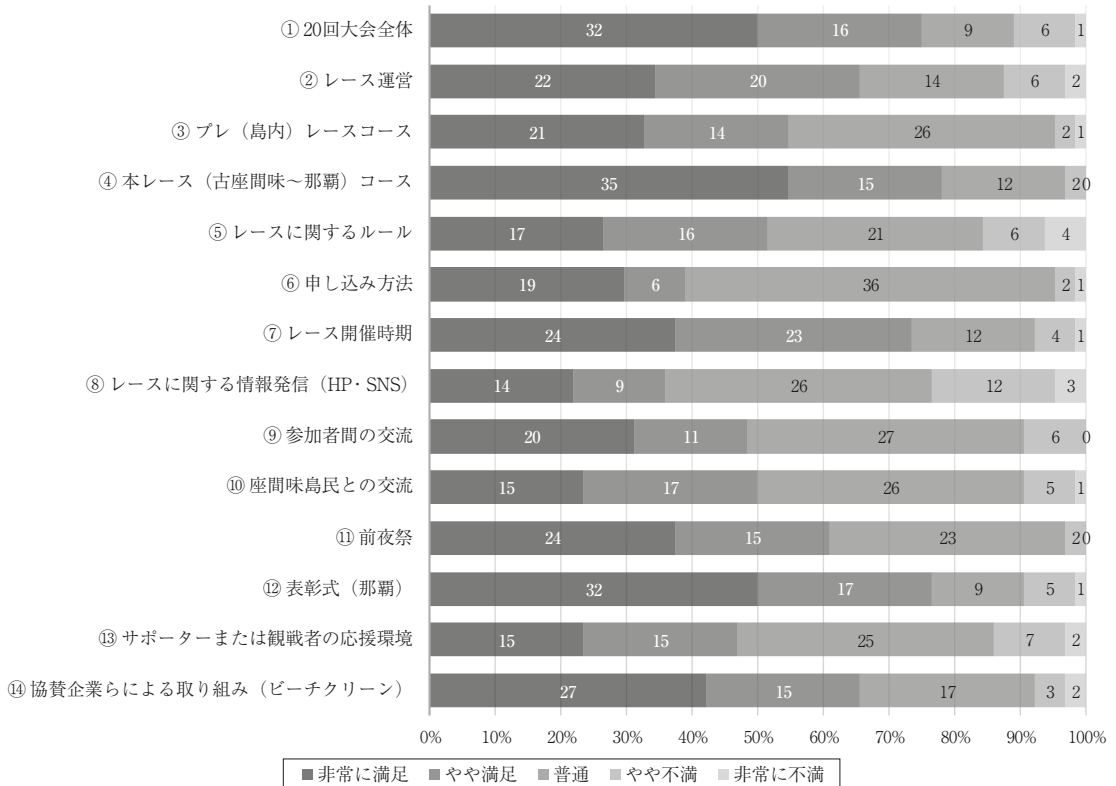


図4 参加者満足度

コース」「⑦ レース開催時期」「⑪ 前夜祭」「⑫ 表彰式」「⑭ 協賛企業らによる取り組み（ビーチクリーン）」については、回答者の半数以上が「非常に満足」もしくは「やや満足」と回答している。特に台風等による海象悪化によるコース変更を除き、第1回から変更されることなく設定されている座間味島～那覇間の約36kmにわたる海峡横断コースについては、満足度が非常に高いことが示唆された。また、「⑥ 申込み方法」「⑧ レースに関する情報発信」「⑬ サポーターまたは観戦者の応援環境」については満足度が高いとは言えず、情報の周知や広報に関して改善が必要であることが窺えた。

直近に参加したサバニ帆漕レースにおける滞在期間のうち、スタート地点である座間味島での滞在期間は、座間味島居住者を除くと2泊3日（21名・32.8%）が最も多く、次いで3泊4日（9名・14.1%）、1泊2日（7名・10.9%）であった。最も長く滞在する回答者は、県外からの参加者で4泊5日（4名・6.3%）であった。サバニ帆漕レースではサバニに乗船しないメンバーも伴走艇にて島を後にするため、レーススタート後に座間味島内に宿泊することは考えられず、レース5日前から島内にて整備や調整を行ってレースに臨んでいることが示された。

また、レース前後における沖縄本島での滞在については、前・後泊する参加者が最も多く（21名・32.8%）、次いで宿泊しない（20名・31.3%）、後泊のみ（18名・28.1%）であった。最も回答が多かった前・後泊するという回答者は、すべて県外からの参加者もしくは沖縄県諸島部（久米島・西表島）であった。本島にて宿泊しないという回答者は、本島および座間味島居住者であり、後泊のみの多くは座間味島居住者であった。

サバニ帆漕レースへの参加を決めた理由およびサバニ帆漕レースの魅力についての自由記述での回答から、質的データ分析手法であるSCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いてカテゴリーを生成した。回答として得られたテキストは「」, テキストから生成したカテゴリーを〈〉で示す。サバニ帆漕レースの参加を決めた理由として8個のカテゴリーが生成された。「勝ちたいから」「漕ぐことが大好きだから」といったレースもしくは動力のない舟艇で海に出る行為自体を示唆した〈アイデンティティ〉, 「地元のイベントだから」「メンバーに誘われた」と沖縄県居住者が多く回答していたように〈サバニ文化が身近にあった〉こと, 「昔の（エンジンのない）サバニが好きだから」といったサバニという舟艇そのものに魅力を見いだしている〈サバニの魅力〉,

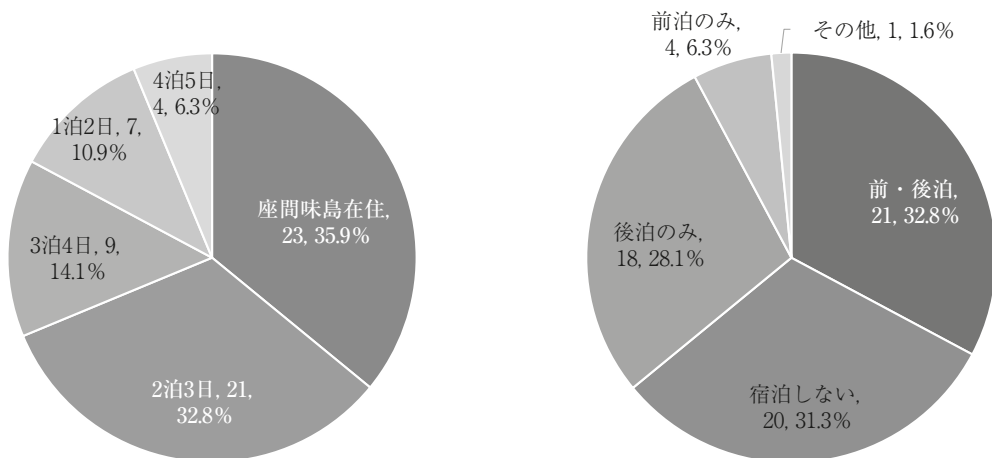


図5 レースにおける滞在期間（座間味島（左）・沖縄本島（右））

「サバニを所有することができた」といったレースに参加するための〈環境が整う〉ことでレースへの参加が叶ったという回答も見られた。また、「小舟で海峡横断する、冒険的で刺激的な要素を持っていること」といった慶良間海峡を横断する活動に内包される〈自然環境に対する魅力〉、「チーム皆で漕ぎ、海を渡りたい」といったチーム一丸となって同じ目標に向かい、達成感を共有できる〈チームとしての楽しみ・挑戦〉、「ゴールした時

の達成感がたまらない」、「自然のなかに小舟で出ることを単純に楽しみたい」といった〈個人としての楽しみ・挑戦〉、「愛好家同士の懇親」といった〈レースに付随した楽しみ〉のカテゴリーを示すことができた。

サバニ帆漕レースの魅力は、「年1回の帆掛けサバニの祭典」と言われる〈イベント性〉、スタート地点である座間味島を含む慶良間諸島の「海的美しさ」や「沖縄の海（波や流れ、美しさ、

表2 サバニ帆漕レースへの参加を決めた理由 (SCAT 分析による)

カテゴリー	テキスト
アイデンティティ	勝ちたいから 男のロマン 漕ぐことが大好きだから
サバニ文化が身近にあった (座間味・糸満居住者)	舵取りが居なくて困ってたチームだったから 連続して出場しているから流れで参加 地元イベントだから 伝統船のレースが地元でやっているから 面白そうだったから みんなで那覇まで漕ぐことが楽しそうだった 区民あげての行事のため、お世話になった島への帰島も兼ねて、島を盛り上げたい 後輩からの誘い 久しぶりに出られたから
サバニの魅力	昔のサバニが好きだから サバニに乗る目標の通過点として
環境が整う	サバニを所有することができた
自然環境に対する魅力	継続的に参加していること 小舟で海峡横断する、冒険的で刺激的な要素を持っていること 前島の潮目と勝負するため レースが好きというより、自分達の力でサバニで慶良間横断を試みたかった 自然のなかに小舟で出ることを単純に楽しみたい 海楽しさがつまったレースだと感じるの
チームとしての楽しみ・挑戦	チームで完走を目標に参加 チームで楽しくサバニを漕ぎたかったから チームイベント クラブのみんなとレースに参加することに意義があるから チームメンバーの出場したいという意思 チーム皆で漕ぎ、海を渡りたい
個人としての楽しみ・挑戦	楽しいうえに達成感もあるから 毎年の楽しみであり、このレースのために1年間積み重ねてきたので参加しない理由がない 楽しいから 自分の海の世界を広げるため ゴールした時の達成感がたまらない 常に参加して楽しかったから 毎年参加する事に喜びを感じている。古式サバニのカテゴリーでの優勝を目指して 過去二回出たレースでやりきれないことがあった 以前リタイアしたので
レースに付随した楽しみ	愛好家同士の懇親

表3 サバニ帆漕レースの魅力（SCAT 分析による）

カテゴリー	テキスト
イベント性	年1回の帆掛サバニの祭典 年に一度の原点復帰
景観	海の美しさ 沖縄の海・自然に直接触れることができること。サバニを漕ぐことで、沖縄の海（波や流れ、美しさ、厳しさ）を体感することができること 古座間味ビーチの美しさ
自然への理解	人と海と風 海のもつ力、楽しさ、厳しさ、美しさ等々を知ることができる 自然の強さや怖さを有難さ教えてくれるもの
サバニそのものの魅力	ものすごく原始的な船で風と人力を駆使して海を渡るという至極シンプルな所 自然に試される サバニの凄さ 人力と風力だけのシンプルな点 風とバドルで本島までレースをすること 帆と櫂の人力で船を操船することサバニ自体の漕力に興味がある あの海原のウネリの中、風を取りサバニを漕ぐ。舟と皆んなが一体になる 機装の準備 サバニという琉球地方の文化に直接的に触れることが可能であること。サバニレースに出ることで、サバニを理解し、操船技術を向上させることができること 伝統サバニで青い海に居ること 沖縄の伝統を楽しめること 伝統文化とスポーツイベントの融合 恵まれた環境の中、伝統を次世代に生かすために競技へと昇華した貴重性や取り組み 沖縄伝統の船を世界に発信でき地元の子供たちが帰ってくるきっかけになる 温故知新
サバニを通じた共感性	海へ関わる事を日々欲している生活の中で、普段違う事をしている仲間と35km漕破を目指し、成し遂げる達成感が一番の魅力、時間を共有出来る楽しみ ゴールした時の達成感。チームメイトとの一体感 サバニと一緒に乗り、帆漕することで、仲間意識や共感性が高まること。何より、美しいこと 他チームであってもサバニという共通点を持ちシーマンシップを強く感じることができること。同じ海況をそれぞれのサバニで同じ苦しさや苦悩、工夫を経験し、それを共有できる雰囲気があること
チームワーク	慶留間島民みんなでの協同 力を合わせて過酷なレースを乗り越えること レースに勝つことというよりは、島の人々と一緒に一つの目標（無事に那覇に着く）に向けて一丸となって取り組めること チームの和 チーム（複数人）で1つのもの（サバニ）を動かすという面白さ クルー全員でやり遂げること サバニの管理、フーヤ、フー柱など自分達で考え工夫して作りや、サバニ好き方々と渡る綺麗な海をサバニで渡られること 1年掛けて、練習、船のメンテナンスして、チームワークで海を渡る達成感 チームワークであの海峡を漕ぐこと
仲間との交流	自分たちのチームの仲間とサバニに乗る他の仲間との交流 サバニに乗る原点を気づかせてくれること いろんな人たちと交流できる 地元、県外の人との合流の場ができる 仲間との絆が深まる 漕ぐだけではない楽しさ 目標（完走）到達と愛好家同士の懇親 サバニを通じて、たくさんの海を愛する人々と出会うことができること。サバニを通じて、座間味島の人々との関係を深めることができること
非日常的な体験	36キロも舟を漕ぐという非日常感 貴重な体験 仕事、家族、地域などの日常とは別の楽しみ 非日常

達成感	ゴール時の達成感 外洋を渡る達成感
冒険的要素	一度として同じ状況がない。風向、風力、海面状況、波の高さ、流れの速さ、メンバーの技量。その時々状況判断が試される。どこまで。何をするか。何が出来るか。これが魅力かも 大海原を風と人の力だけで進むこと 自然への挑戦 自然と向き合うこと 海を渡ること。伴走船がなければ、なおよい 自力で那覇まで行く爽快感 自然との共生 自然に揉まれること 仲間と自然の力と想像力 自然を感じ海の怖さも知ることができる いつも船で渡っている那覇までをサバニで漕ぐということ 海峡横断するという冒険的な体験ができること

厳しさ)を体感できること」といった〈景観〉に関する記述、「自然の強さや怖さ、ありがたさを教えてくれるもの」といった〈自然への理解〉、動力のない伝統船で大海原へ出るという「ものすごく原始的な船で風と人力を駆使して海を渡るというシンプルなところ」のような〈サバニそのものの魅力〉、「他チームであってもサバニという共通点を持ちシーマンシップを強く感じることができると」やチームでゴールを目指して漕ぐことにより感じられる〈サバニを通じた共感性〉、船のメンテナンスなどを通して得られるサバニへの愛着と「チームで1つのものを動かすという面白さ」から得られる〈チームワーク〉、サバニを通じて愛好家同士の輪が広がる〈仲間との交流〉、「36キロも舟を漕ぐ」という〈非日常的な体験〉や様々な困難を乗り越えてゴールしたときの〈達成感〉、そして慶良間海峡の海を「大海原を風と人の力だけで進む」〈冒険的要素〉の10個のカテゴリーが生成された。

4. 考 察

4-1 レースキャリアと参加理由

今回の調査において、参加回数は2～4回が32名(50.0%)と最も多く、初参加を除くと約90%の回答者が過去にレースへの参加経験があることが明らかとなった。その理由として、時によって

は激しい潮流や前の船が見えなくなるほどの波を乗りこなさなければならぬ外洋がレースコースとなっていることから、海に関する知識だけでなく刻々と変化する潮流・風向・波高を感じとり、その海域が持つ特有の変化や特徴を捉えることができる海上での活動経験が必要であることが挙げられた。完漕するためには、帆掛けサバニをコントロールするためのチームワークや操船技術など多くの要素が影響し合うことから、船の特性を十分に理解したうえで同海域でのレースキャリアがあるクルーがいる必要性が示唆された。また、6名で操船するチームスポーツの要素もあり、各クルーが役割を理解しつつ全体でバランスを取るといった共通理解ができていることが必要であり、チームとしてのキャリアも求められるレースであることが考えられた。レースへの参加理由に対する自由記述においても、慶良間海峡を横断するなかで直面する自然の厳しさも含めた〈自然環境に対する魅力〉が挙げられており、慶良間海峡横断はレース経験者であっても困難な状況が起こりうるコースであることが示されている。そのような困難な状況を乗り越えようとチーム全員で必死に取り組むことが〈チームとしての楽しみ・挑戦〉に繋がり、大海原に翻弄されながらゴールを目指すといった〈冒険的要素〉が参加者の〈達成感〉として得られ魅力となっていると考えられた。

本調査において回答が得られた64.1%は沖縄県

在住者であり、その多くはレース開催地である座間味島に居住するか、座間味島と何らかの関わりを持っていることによりサバニ文化が身近にあり、チームにも比較的加入しやすく、帆掛けサバニを既に所有しているといったレースに参加するための環境が整っていた。また、沖縄県在住の参加者には座間味島周辺を含め慶良間海峡を活動範囲とするカヤックガイドやスクーバダイビング業者として従事している人も多く、海域の潮流や時間による海峡の変化なども日常的な活動から体験を通して知識を得ていることが考えられた。

沖縄県外からの回答者23名のうち、沖縄県内のチームに所属していたのは6名であり、17名は東京都や神奈川県などのチームに所属する者であった。沖縄県外からの参加者は決して簡単にはゴールできないこともある慶良間海峡が包括する自然の美しさと厳しさといった自然環境に魅力を感じている回答が多くあり、沖縄県外居住者にとっては特に自然の豊かさや魅力を感じられるレースのコースであることが考えられた。沖縄県外に居住する参加者のレース平均参加回数は5.1回で、10回以上の参加経験がある回答者は5名おり、沖縄県内に居住する参加者のレース平均参加回数5.9回と比較しても大きな差はなく、参加者の居住地に関係なく20回開催されてきたレースのなかで経験を積み重ねていることが明らかになった。

4-2 マイノリティによる実践の工夫

サバニ愛好家であるレース参加者は、サバニを保管するための艇庫がある座間味島にサバニを置いているとの回答が56.3%と最も多く、座間味島居住者のみならず沖縄県外に居住する回答者にも見受けられた。次いで沖縄県糸満市にサバニを保管しているとの回答が20.3%であった。沖縄本島に居住する回答者が多く、糸満市のサバニ浜は、現在では数少ないサバニ大工の工房がある場所であった。シリアス・レジャーとしてのスポーツにおいては、経験の積み重ねと専門知識に基づいた努力（練習やトレーニング）が求められるが、シリアスであるが故に同じ専門志向を持つ仲間が近

くにいることが少ないことも特徴の1つであると言われている¹⁰⁾。レースで用いるサバニは個人で海に漕ぎ出せる大きさではないため、回答者はサバニ保管場所を練習拠点とし、サバニを置いている複数のチームのクルーが集まって練習するといった練習環境を工夫していることが示された。特に糸満市の保管場所はその傾向が強く、沖縄本島に居住するサバニ愛好家たちがチームの垣根を越えてお互いのサバニに乗り合い、そこで得たものを自らのチームに持ち帰るといった工夫をすることで、チームの人数が揃わないことや愛好家が少ないといったマイノリティを克服していることが考えられた。

4-3 参加者の行動特性

サバニ帆漕レースに参加するためには、座間味島居住者を除き沖縄本島から座間味島へ移動する必要がある。座間味島－那覇間は1日3便の高速船もしくは1日1便のフェリーでの移動となる。前日のプレレースを含め、レースに出場するためには少なくともレース前日には座間味島内に到着している必要があり、必ず島内での宿泊が伴うことになる。レースにあたり座間味島島内での滞在期間は、座間味島居住者を除いた回答者では2泊3日が最も多く、サバニの調整・整備や現地でのチーム練習のほか、海況の確認を含め自然に馴染むための時間としていることが示唆された。また、島内で宿泊を伴うことにより宿泊施設などにおいても島民との交流や、他の参加者との交流を図る機会にもなっていることが考えられた。

一方、座間味島居住者は那覇にてゴールする時刻には、那覇から座間味島への移動手段が既に途絶えている時間であることから、那覇市内に宿泊せざるを得ないことになる。沖縄本島での滞在期間のうち「後泊のみ(28.1%)」と回答したほとんどは座間味島居住者であり、沖縄本島居住者は「宿泊しない(31.3%)」との回答が多かった。沖縄県外からの参加者は、レース後のサバニ保管場所への移動や片付けを含め沖縄本島で「前・後泊(32.8%)」しており、サバニ帆漕レースは沖縄県

外からの参加者にとってはレースに付随した観光も含めたスポーツツーリズムの要素を持つことが考えられた。

4-4 サバニ帆漕レースの魅力

シリアス・レジャー実践者において同じ専門志向を有する仲間がそれほど多くないことは前述のとおりであるが、回答者はマイノリティでありながら継続的にサバニ帆漕レースに参加している傾向があった。レースへの参加を決めた理由にも挙げられているとおり、座間味島-那覇間の慶良間海峡を横断するコース設定において、景観の素晴らしさおよび決して容易ではない海峡横断の難しさも含めた〈自然環境の魅力〉があることが指摘できる。また、そのコースには〈冒険的要素〉が多く含まれており、参加者にとっては困難な状況乗り越えてゴールした〈達成感〉に繋がっていることが考えられた。参加者による満足度調査においても、「④本レース(古座間味~那覇)コース」において「非常に満足」との回答は54.7%とすべての質問の中で最も高い支持を得ており、「やや満足」の回答を含めると参加者の約8割がコース設定に満足していた。美しい景観と、海況を攻略するための知識や判断力、そして操船技術を駆使することになるコース設定がサバニ帆漕レースの魅力に繋がっていることが示唆された。サバニ帆漕レースは20回を超えという長期継続するスポーツイベントとなっている。離島と沖縄本島を結ぶコース設定が沖縄本島に居住するサバニ愛好家や沖縄県外のマイノリティを巻き込み、座間味島内の参加者だけに留まらないサバニ愛好家が集まるイベントに成長した要素の1つであることが考えられた。

また、サバニ帆漕レースはチームで1つのサバニを操船する面白さや、〈サバニを通じた共感性〉といったチーム一丸となって目標に向かう〈チームワーク〉を要することが、他のシリアス・レジャーとは異なる魅力となっていることが指摘できる。

5. ま と め

本研究の目的は、慶良間海峡を伝統木造船にて横断するサバニ帆漕レースをシリアス・レジャーの特徴を有する活動の1つと位置づけ、シリアス・レジャーとしての海洋スポーツ実践者の特徴を明らかにするための基礎資料を得ることであった。サバニ帆漕レースには、海況の変化を瞬時に捉えて対応し、船の特性を十分に理解したうえでサバニをコントロールできるといった操船経験が要求され、各クルーが役割を理解しチーム一丸となりゴールを目指すといったチームとしてのキャリアも求められるといった他のシリアス・レジャーとは異なる特徴が認められた。また、参加者は沖縄県内・県外の居住地に関係なく複数回のレース参加経験があり、20回開催されてきたレースのなかで、慶良間海峡横断に関わる自然環境を理解し、帆掛けサバニ操船経験を積み重ねていることが明らかとなった。

参加者がレースへの参加を決めた理由については、レースもしくは動力のない舟艇で海に出る行為自体を示唆した〈アイデンティティ〉の他、〈サバニ文化が身近にあった〉、伝統木造船である〈サバニの魅力〉といった古くからサバニと関わりのある地域であるが故の理由や、サバニを所有できたといったレースに参加するための〈環境が整う〉ことが挙げられた。また、開催地である座間味島やコースである慶良間海峡の〈自然環境に対する魅力〉や、〈チームとしての楽しみ・挑戦〉、〈個人としての楽しみ・挑戦〉、〈レースに付随する楽しみ〉といった刻々と変化する自然環境に挑戦することやチームの仲間と共通体験を共有できる楽しみなどが起因する8個のカテゴリーが挙げられた。

参加者の行動特性としてレース中の滞在期間については、座間味島居住者以外の参加者はサバニの調整・整備や現地でのチーム練習のほか、海況の確認を含め自然に馴染むための時間としてレー

ス3日前から座間味島に入っていることが示され、座間味島居住者はレース後に沖縄本島にて宿泊していることが示された。

レースの魅力については、10個のカテゴリーが挙げられた。参加者は海峡横断に挑戦するという〈イベント性〉や〈非日常的な体験〉のみならず、自然を相手にする〈冒険的要素〉が含まれる慶良間海峡を横断するコース設定について高い支持を示しており、困難な状況を乗り越えた〈達成感〉が得られるレースであった。開催地やコースにおける〈景観〉や〈自然への理解〉、〈サバニそのものの魅力〉といった、帆を操りながらエーク（櫂）を使って船を漕ぐという古来より伝わるサバニ操船技術の再現と文化継承を目的に開催されたイベントならではのとも言える魅力が挙げられ、沖縄県外居住者にとっては、自然の豊かさや魅力を感じられるコース設定であることが示された。

シリアス・レジャーの特徴として専門志向を持つ仲間が近くにいないマイノリティが挙げられるが、サバニレース参加者はサバニ保管場所を拠点として、チームの垣根を越えて練習をするといった環境を整えていた。また、レースにおいては、同じ海峡横断の困難を乗り越えゴールを目指した共通体験によって異なるチームであっても〈サバニを通じた共感性〉を認識しており、〈チームワーク〉や〈仲間との交流〉がレースの魅力として挙げられ、レースへの再参加意欲にも繋がっていた。

最後に、20回を迎えたサバニ帆漕レースを今後も引き続き継続していく海洋スポーツイベントにしていくための課題として、サポーターや観戦者の応援環境について検討していく必要性が示唆さ

れた。

附記：本研究はJSPS科学研究費18K10922の助成を受けたものです。

引用文献

- 1) Stebbins, R. A. : Serious Leisure: A Perspective for Our Time. Transaction Publishers, 1-23, 2015.
- 2) Ibid., p. 5.
- 3) 橋本和也：スポーツ観光研究の理論的展望—「パフォーマー・観光者」への視点, 観光学評論, 4(1): 3-18, 2016.
- 4) 織研新聞社電子版, オンジャパンがランニング向け再強化 よりシリアスランナーへ, <https://senken.co.jp/posts/on-running-220815> (閲覧日: 2022年11月7日).
- 5) Stebbins R. A. : Amateurs, Professionals and Serious Leisure. McGill-Queen's University Press: Montreal, 1992.
- 6) Patterson, I., Getz, D., & Gubb, K. : The social world and event travel career of the serious yoga devotee. Leisure Studies, 35(3): 296-313, 2016.
- 7) Lee, C., Sung, Y.-T., Zhou, Y., & Lee, S. : The relationships between the seriousness of leisure activities, social support and school adaptation among Asian international students in the U.S. Leisure Studies, 37(2): 197-210, 2018.
- 8) Heo, J., Stebbins, R. A., Kim, J., & Lee, I. : Serious Leisure, Life Satisfaction, and Health of Older Adults. Leisure Sciences, 35(1): 16-32, 2013.
- 9) サバニ帆漕レース公式ホームページ, https://www.photowave.jp/sabani_s/ (閲覧日: 2022年8月21日).
- 10) Stebbins R. A., 前掲書, 3-8.